

熊本県立大学学部留学生の 日本語に関するニーズ調査

梅 田 千砂子

1. はじめに

平成8年4月から熊本県立大学に留学生のための日本語コースができた。出来るだけ効果の上がるコースを設定するためには、学習者の目的に合ったコースデザインを行い、教えるべきことを明確にしなければならない(注1)。そのためには、まず学習者がどんな目的で日本語を習得しようとしているかを調査し分析することが必要である。これを本稿ではニーズ分析と呼ぶ。ニーズ分析とは、学習者の情報を収集し分析する作業で、コースデザインの中で最も重要な部分であり、教育全体の出発点となる(田中 1988:10)。そこで、実際に学部留学生を対象に面接調査を行った。本稿では、ニーズ分析の意義と方法を述べると共に、この調査結果を報告し分析を試みる。

2. ニーズ分析の意義

日本語コースの授業内容は、学習者の目的によって異なる。留学生、ビジネスマン、外交官、海外帰国子女など、日本語を学習する人たちは様々で学習目的も多様である。このように学習目的の違う学習者に一般的な日本語を教えても、本来の目的場面では直接役に立たないことが多い(日本語教育学会 1991:6)。役立つ日本語を教えるために、コースデザイナーは、そのコースで学ぶ学習者が本当に必要としているものは何であるかを把握する必要がある。そのためには、学習者が必要としている日本語の内容を調査し、分析するのは、日本語教師にとって重要な仕事である。

こうしたニーズ分析が外国語教育で行われるようになったのは1970年代になってからのことである。ヨーロッパ議会の近代言語プロジェクトが、経済活動や観光など、ある特定の目的をもった学習者の行動目標をニーズ分析によって明確にし、それをもとに機能、概念、話題などのシラバスを作成する

ために使用した(Nunan 1988:43)。Nunan(1988)はニーズ分析の意義として Richards(1984:5)を引用し、次のようにまとめている。

- 1) 言語プログラムの内容、デザイン、実行のための情報の収集手段となる。
- 2) プログラムの目標、目的、内容が明らかにできる。
- 3) 実行されたプログラムを見直し、評価する際の判断材料となる。

日本語教育においても、日本語教育学会(1991:23)で「近年ニーズ分析は学習者の背景を調査し、その資料をもとに学習者の学習目的・目標を定め、学習内容・方法を決定し、それによって行われたプログラムを見直す際の資料を得るために必要である」と指摘されている。

3. ニーズ分析の方法

ニーズの定義はこれまで明確化されておらず、様々な研究者がそれぞれのモデルを用いてニーズ分析を行っている(Richterich 1983:2, Hawkey 1984)。

West(1994)は過去に行われたニーズ分析の内容を分類し以下のようにまとめている。

- 1) Necessities: どのような場面でどのような言語が必要とされているのかを分析する。
- 2) Lacks: どのような言語知識が不足しているのかを分析する。
- 3) Wants: 学習者がどのようなことを学習したいと思っているのかを分析する。
- 4) Learning strategies: 学習者が好む学習ストラトジーを分析する。
- 5) Constraints: 学習を取り巻く外的な要因(教師、時間、リソース等)を分析する。
- 6) The language audit: 上記の1)から5)を含めたもので、個人やグループを対象としたものではなく、言語政策や長期間にわたるプログラムに必要とされるものを分析する。

具体的な調査項目について、Brindley(1989)は、客観的なニーズと主観的なニーズに分けている。客観的なニーズの調査項目としては母語、年齢、性

別、国籍、教育、過去・現在・将来の職業、現在までの滞在期間、これからの滞在予定期間、言語能力、既習外国語などである。主観的ニーズの調査項目には、どのような場面でどのような言語表現が必要とされているのか、学習活動、4技能、学習形態、教授法の好み、クラス外での自習時間などである。

ニーズ調査はコースが始まる前に行うもの、コースの途中に行うもの、コース後に行うものがある。コース前のニーズ調査では学習者はニーズを漠然としか捉えることができないこともおこる。コースの途中で新たにニーズを発見したり、慣れるに従って必要なことを認識していくケースも多い。したがってニーズ分析はコース開始後も何回か繰り返して行うことが望ましい(宮地 1993:27)。またコース後のニーズ調査とはそのコースで学習した留学生の日本語使用の実態や問題点などを明らかにし、コースの内容を改善していくものである。

本調査では、いくつかの機関で行われた学習者の実態調査を参考にしながら、以下のことを留学生に質問した(注2)。学習者の①年齢、学歴、職歴、日本語能力試験、②将来の目標、③どのような場面で日本語を必要としているか、④日本語のどのような点に難しさを感じているか、⑤日本語をどの程度必要としているか、⑥日本語の授業に望むこと。調査は、コースの途中で行われた。

4. 本学の留学生に対するニーズ調査

4.1 調査対象留学生

熊本県立大学学部留学生を対象とする。留学生数は5名で全員が中国からの学生である(注3)。以下5名の学習者をA、B、C、D、Eと表記する。

4.2 調査の方法

調査は10月第2、3週の間個人インタビューの形で行った。1人につき、約1時間から1時間半で、筆者との会話は全てテープレコーダーに録音した。

4.3 調査結果

4.3.1 学習者の基本データ

表1の通り、学習者は男性2名で女性が3名である。年齢は女性の方が全体として若い。1年生が1名、2年生が3名、4年生が1名である。3年生

はいなかった。所属学部は総合管理学部総合管理学科が4名で生活経営学科が1名である。日本語学習歴はほとんどの学習者が来日後、1年から2年間日本語学校で学習している。学習者Aのみ3年間と報告しているが、これは、日本語学校で2年間日本語を学習した後、科目等履修生として1年間国立大学で講義を受けたり、日本語を学習したりしたためである。日本語能力試験1級は学習者Eを除き全員が合格している。

表1 学習者の性別、年齢、所属学科、日本語学習歴、能力試験合格

学習者	性別	年齢	学年	所属学科	日本語学習歴	日本語能力試験1級
A	男	25	1	総合管理	3年	○
B	女	25	2	総合管理	2年	○
C	女	22	2	総合管理	1年半	○
D	男	28	2	総合管理	2年	○
E	女	23	4	生活科学	1年	×

4.3.2 学習者の来日前の学歴と専攻、並びに職歴

表2 来日前の学歴と専攻、並びに職歴

学習者	学歴	専攻	職歴
A	大学1年中退	会計学	
B	大学卒	貿易、経済	8カ月
C	高校卒		
D	大学卒	中国語	3年
E	高校卒		

学習者Bは、大学を卒業し、実社会で働いた経験が少しある。大学での専攻は貿易と経済であり、現在専攻している学科で履修している専門科目と関連性が高い。学習者Dも大学を卒業しており、大学では中国語を専攻していて、語学学習が好きであると述べている。3年間会社に勤めた経験もある。

学習者Aは、大学での学習経験はあるが、1年で中退している。学習者CとEは、高校卒業後、すぐ日本に来ていた。

4.3.3 卒業後の計画、将来の目標、働く場所

表3 卒業後の計画、将来の目標、働く場所

学習者	卒業後の計画	将来の目標	働く場所
A	大学院	経営者	中国
B	就職または大学院	企業の管理職	外国か日本
C	就職または大学院	企業の管理職	日本か中国
D	就職	企業の管理職	日本か中国
E	大学院（入学決定）	企業の管理職または 公務員の上級職	中国

学習者はみな将来は企業の管理職に就いたり、公務員の上級職、経営者になりたいという目標を持っている。その目標を達成するために、日本で経済や経営管理について学びたいと思っている。大学で経済や経営管理を専攻し、卒業後働きたいという希望をもっている学習者はBCDで、この中の2名は、もし就職が決まらない場合は大学院へ進む計画をたてている。もう1名は大学院に進みたいという気持ちを強く持っているが、事情によって就職をやむなくされている。学習者Aは、大学院で経済をより深く学ぶという進路を決めている。学習者Eは経済、特に金融論を専門に学ぶため、日本の大学院入学が決まっている。働く場所について、学習者AとEは日本での就職は希望していない。学習者CとDは、しばらく日本で働く経験を積み、それから中国に帰って就職することを理想としている。学習者Bは、日本または日本以外の外国で就職したいという希望をもっている。

4.3.4 前期履修科目について

1年生と2年生を比較してみると、履修科目数は1年生のほうが多い。1年生の教養科目の選択範囲は広く、専門科目の中では基礎科目に履修が多い。

2年生は教養科目の中で留学生のために特設された「日本事情」と「日本語」以外、「現代の科学技術と環境」から1科目を選択している。専門科目の選択範囲が広がり、特に基幹科目からの選択が増える。*印の4年生は、3年時までに卒業に必要な単位をほぼ取得しており、卒業論文を書くことに専念できる。

表4 前期に留学生が履修した科目のリスト

	学習者	1年	2年			4年
		A	B	C	D	E
教養科目	健康科学					
	人間と文化の理解	1				
	国際理解	1				
	現代の科学技術と環境	1	1	1	1	
	現代社会の理解					
	日本事情	1		1	1	
	日本語	1	1	1		
専門科目	基礎科目	6	1	1	1	
	基幹科目		4	4	4	
	展開科目					
	演習	1	1	1	1	
卒業論文 を書く					*	
	計	12	8	9	8	*

4.3.5 日本語活動

1、2年生の学習者に求められている日本語の言語活動として、講義を聞いてノートをとる、試験の解答を書く、教科書や資料を読む、が多い。レポートや感想を書くことが次に続く。4つのスキルの中では話すことはあまり要求されていないことがわかる。講義を聞いてノートをとったり、教科書や資料を読む頻度は、ほぼ毎日いくつかの授業の中で課せられるタスクであ

る。なお、*印は4年生の活動を示すもので、授業中の活動ではなく卒論のための活動である。最も多い活動は、論文を書く、資料を読むことである。次に論文についての発表、指導教官と論文の内容について話す、クラスメートの発表を聞くなどがあるが、頻度は少ない。

表5 それぞれの授業で必要な日本語活動。()は履修科目数を示す

		1年	2年			4年
		A(12)	B(8)	C(9)	D(8)	E(1)
聞 く	講義	9	5	5	5	
	ビデオ	1	1	1	1	
	クラスメート	1	1	1	1	*
	スライド説明		1	1	1	
読 む	教科書	5	4	4	4	
	資料	7	6	7	7	*
書 く	レポートや感想文	3	2	3	3	
	ノートをとる	9	5	5	5	
	試験の解答	9	7	7	7	
	卒業論文					*
話 す	ゼミ等で発表する	1	1	1		
	意見、感想を述べる	1	1	1		
	クラスで質問をする	1	1	1		
	学習内容を指導教官と話す 卒業論文等を発表する					* *

4.3.6 スキルの難易

4つのスキル、①読む②聴く③話す④書くについて難しいと思うものから順番に答えてもらった。

Eを除く全員が、書くことが一番難しいと答えている。学習者Aは理解よりプロダクションが難しいと思っている。学習者BとDは読むことが書くことに続いて難しいと指摘している。漢字圏の学習者にとって読むことは他のスキルと比べて易しいと感じているとする報告は多いが、この結果は意外で

あった。学習者CとEは講義を聴くことに難しさを感じており、聴解を難しいスキルの上位にあげている。話すことを第3位にあげている学習者BCDは日本語で自分の言いたいことは何とか話せると感じている。第4位にあげられているスキルは読むことか聴くことである。

表6 スキルの難易

数字は、①読む②聴く③話す④書くを表す。

学習者	順番
A	④③②①
B	④①③②
C	④②③①
D	④①③②
E	②③④①

4. 3. 7 困難点

日本語を使う時、どのような点で困難を感じているかという質問に対して表7のような回答を得た。全員が語彙や表現力、複雑な文型についての知識に乏しく、簡潔に言いたいことがあっても表現できないと述べている。学習者Cが聴く、全員が読む、に関するストラジーについての問題点もあげている。学習者Aから発音の問題も指摘された。

表7 困難点

学習者	困難点
A B C D E	<p>・読むことに関して、知らない語彙や表現があり、要点が的確に掴めない。</p> <p>・読み進めていく過程で、読んだことが蓄積できないので読み返さなければいけない。</p> <p>・複雑な文章の意味がわからない。</p> <p>・簡潔な文章が書けない。</p> <p>・専門的なことが深く表現できない。</p> <p>・語彙や表現が乏しく、言いたいことがうまく表現できない。</p>

A ・発音が悪い。

C ・講義を聴いている時、要点が掴めない。話していることを全部書いてしまう。

4. 3. 8 問題解決法

日本語について問題がおきた時、どのように解決しているかを聞いた。

表8 問題解決法

学習者	問題解決法
A B C D E	<ul style="list-style-type: none"> ・友達からノートを借りる ・友達に聞く
B	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館で関連のある本を借りて読む

講義がわからない時、どの学習者も友達からノートを借りている。学習者CとEからは次のような報告があった。学習者Cは、1年生の前期は友達も作れず、ノートを借りることもできなかった。わからない時はそのままにしておいた。学習者Eは1年生の時は、友達からノートを借りて勉強したがよくわからなかった。勉強の仕方もわからず、成績が悪かった。学習者A Cは、たいていノートを借りることによって問題点は解消できると述べた。学習者Bからは、1年生の時はほとんどノートは借りず、わからない時は図書館で関連のある本を探して読み、自分で解決したという報告があった。

4. 3. 9 日本語授業の必要性

全員が1年生の時は日本語の授業が必要であると報告している。2、3年生における日本語授業の必要性は必ずしも全員が感じてはいない。4年生では論文の書き方指導などを望む声もあった。

表9 日本語授業の必要性

学習者	日本語の授業の必要性
A	・1年から4年まで履修したいと思う。
B	・3年は履修科目が多いので選択科目である日本語の授業は受けな いかもしれない。4年になったら、論文を書くことに集中したい。
C	・1年の時、日本語の授業の必要性を強く感じた。3年まで日本語 の授業をとりたい。4年になったら、論文を書くことに集中した い。論文指導のための特別なコースがほしい。
D	・1年生には必要だと思うが、2、3年は選択科目なのでその時の 事情によって決めたい。4年になって論文書きに集中できるよう になったら、論文指導をして欲しい。
E	・1、2年生の時、日本語の授業は必要だと思う。3年になって履 修科目が多くなったが、授業にはついていけるようになり、日本 語力にも自信が付き始めた。4年生向けに論文指導のための特別 なコースがほしい。

4. 3. 10 日本語の授業に望むこと

表10 日本語の授業に望むこと

学習者	望むこと
A B C D E	・語彙や表現を増やしたい。 ・日常会話的な日本語ではなく、レポートや論文が書けるよう に指導してほしい。
A	・文学作品を読みたい。 ・言語について、基本的なことを学習することは必要だと思う が、現実のコミュニケーションと直接関連付けてほしい。
C	・他の履修科目と関連したトピック、または語彙を増やすため に自分にとって新しいジャンルの読み物や内容を扱ってほし い。

- ・学習者の能力に合った内容にしてほしい。簡単すぎると無駄な時間を過ごしているように感じる。

- E
- ・卒業論文の書き方を指導して欲しい。文献の引用の仕方や構成、表現、文法など。
 - ・論文の発表の仕方を指導して欲しい。指導教官や他の先生、学生の前で発表するのはとても緊張する。質問をされてわからない時などどう対処してよいかわからない。
 - ・文献の探し方を指導して欲しい。県大図書館と県立図書館にない文献を、どのように入手するかわからなかった。

全員が語彙や表現力をつけ論文やレポートが書けるようになることを望んでいる。扱う教材の内容には実際の場面に即したものや、いろんな分野からのもを選んで欲しいという希望がでた。4年生は、特に卒業論文を書くための指導を求めている。

5. 考察

日本語学習者数が増えると共に、学習者の質も多様化している。本稿の調査対象となった5名の留学生も国籍、専攻は同じであるが、年齢、経歴などは様々である。学習者の背景によっては、大学生としての学習ストラテジーを身につけている場合と付けていない場合がある。既に大学在学経験のある学習者は、大学での学び方がわかっていて困ったという経験はないようである。しかし、日本で初めて大学生活を送る学習者には、日本語力の問題と同時に大学という教育機関での学習経験の不足による問題があることがわかる。このような学習者のためには大学での学び方を指導したり、困った時に相談できる日本人の援助が必要であり、チューター制度を設けることなどを考えてみる必要があるだろう。

日本語の授業の必要性については、どの学習者も認めている。特に、1年生の時には全員履修したいと述べている。しかし、2年生以降、選択科目である日本語は、履修しない学習者がいる。卒業のために必要な科目ではないことが1つの理由となっている。日本人が使うような日本語を習得したいという理想はあっても、現状のままでも専攻科目の授業に何とかついていける場合は、あえて日本語の授業を受け、日本語力をつける必然性がないという

ことであろう。また日本語を履修するかしないかを定める判断材料として、その授業の内容がある。自分のニーズに合わない内容では選択したくないのは当然であろう。現在日本語の授業は1クラスしかない。学年や日本語能力に合わせたクラス編成は不可能である。したがって、個人のニーズにどこまで答えられるかは疑問であるが、できるだけ全学習者個人に対応できるように教室活動を工夫する必要がある。

日常生活での日本語は問題ないが、困難を感じている点として、専門的なことについて深く理解したり、表現できないことがある。その原因は、語彙や慣用句、構文についての知識が十分ではないことがあげられる。さらに、読み物や講義を聴いて要約ができないとか、読み返さないと理解できないという点は、聴解や読解のストラトジーについての知識不足も原因と考えられる。4つのスキルの中では、書くことが一番難しいと思っている学習者が多い。学習者の中には、書くことの難しさは、言語的な問題だけではなく、考えがないので書けないというもっと根本的な問題の指摘もある。「表現力不足の原因は…方法への無知や思考活動の不活発さにある。…材料があり技術と方法を会得すれば誰でも一定のところまではできるということも教える」必要がある(柴田 1988)。

日本語の授業への希望として、語彙を増やし表現力をつけたい、簡潔な日本語でレポートや論文が書けるよう指導してほしいというのが全員から出ている。語彙を増やすためには、日本語による日々の活動が必要なだけでなく、ある学習者が困難点として指摘しているように、読解についての指導も大切である。聴解については、日本語以外の授業の中での日本語活動として頻度の高いものである。講義の時に要点が掴めない学習者もいるが、特に講義が聴けるようになるための指導を望む者はいなかった。講義を聴くことについては、学習者の聴解力というより、先生の講義内容や、話し方の癖などが原因で理解ができないという指摘もあった。具体的には、内容が深すぎる、板書がない、教科書や講義のレジメがない、早口、発音が紛らわしいなどであった。わからない時には友人からノートを借りて対処できることも聴解練習の必要性を感じない原因であろう。また論文の書き方等は、日本語教師による授業だけで教えられるものではなく、指導教官や図書館司書の協力も必要となる。特に現在はクラス編成が学年別ではないので、4年生で特に必要性が高い論文の書き方指導を学生が満足するような形で行うのは難しい。

6. おわりに

今回のニーズ調査の結果から以下のようなことが明らかとなった。

- 1) 学習者の年齢や経歴は様々であるが、特に日本で初めて大学生活を送る学生を支援する人的なリソースが必要である。
- 2) 1年生にとって日本語の授業は不可欠である。何人かの学習者は4年時点で卒業論文の書き方指導を望んでいる。
- 3) 日本語の授業以外で求められている日本語活動、困難点、学習者の希望を合わせると、日本語の授業で教える4技能の中で、書くこと・読むことの方が、聴くこと・話すことより優先されると判断できる。
- 4) 実際の大学の授業の中で必要とされている書く活動、読む活動の頻度の高いものとして、試験の解答を書く、ノートをとる、レポートや感想文を書く、資料を読む、教科書を読むことがあげられる。
- 5) こうした活動目的を達成させるために語彙、表現力という言語的な要素とともに、書くこと、読むことに必要なストラトジーも養う。
- 6) 教材などで扱うトピックは一般教養から専門まで幅広い分野から選ぶ。

この調査の対象となった学習者の数が少なく、また3年生からの資料は得られなかった。今後、さらに1年生から4年生まで資料を蓄積し、学習者のニーズがどう変化するか調査も必要である。その際、二宮(1988)の、学習者の自己判断は必ずしも自分の日本語力を的確に診断するものではないという指摘には耳を傾ける必要がある(注4)。学習者の内面的なニーズを探るためには面接調査だけではなく、ジャーナルや授業観察などの方法で多角的に学習者を見ていくことも大切である(今井史子 1996、Kelliny 1994)。さらに、留学生の指導教官に対しても、どのような日本語を留学生に求めているかというニーズ調査を行いたい。ニーズ分析は、学習者だけでなく大学の教育担当者に対しても実施するのが原則である(日本語教育学会 1991:6)。このような努力によって、留学生の目的に合ったコースが実現していくのである。

注

1. 田中(1988:5)はコースデザインについて、ある目標が設定されたときに、それを達成するためにもっとも適切な学習項目を設計し、教授法、

教材、教室室活動などを設計することであると述べている。

2. 日本語教育からは、岡山留学生センター、東京工業大学留学生センター、東北大学留学生センター、名古屋大学留学生センター、熊本大学の報告書並びに論文を参考にした。さらに英語教育からは、Kelling(1994), Munby(1978), Mackay(1981), Ostler(1980), Robertson(1983)の論文を参考にした。
3. 本コースでは、研究生、県費留学生も学んでいるが、学部留学生を中心に授業が行われている。
4. 二宮皓の論文は、小脇光男(1990)の引用による。

参考文献

- Brindley, G (1989) "The role of needs analysis in adult ESL programme design." In Johnson, R (ed.): *The Second Language Curriculum*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hawkey, R (1984) "From needs to material via constraints? Some general considerations and Zimbabwean experience." In Read, J (ed.): *Trends in Language Syllabus Design*. Singapore: SEAMEO Regional Language Centre.
- Kelliny, M (1994) *Needs Analysis and Language Awareness in an EFL/ESP Context: A Case Study*. Ph.D.Dissertation. University of Liverpool.
- Mackay, P and Bosquet, M (1981) "LSP curriculum development - from policy to practice." In Mackay, R and Palmer, D (eds.): *Language for Specific Purposes*. Rowley: Newbury House Publisher, Inc.
- Munby, J (1978) *Communicative Syllabus Design*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Nunan, D (1988) *The Learner - Centered Curriculum*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ostler, S (1980) "A survey of academic needs for advanced ESL." *TESOL QUARTERLY* VOL. XIV, No.4 Dec. p. 489 - 502.
- Richterich, R (1983) *Case Studies in Identifying Language Needs*. Oxford: Pergaman Press.
- Richards, J (1984) "Language curriculum development." *RELC Journal*, 15,1.
- Robertson, L (1983) *English Language Use, Needs, and Proficiency among Foreign Students at The University of Illinois at Urbana - Champaign*. Ph.D Dissertation. The University of Illinois at Urbana - Champaign.
- West, R (1994) "Needs analysis in language teaching." *Language Teaching*. p. 1 - 19.
- 今井史子他(1996)「『最適化』への試み—ニーズ班の活動報告と提言—」『平成7年度日本語教育研修会実習課程報告書』日本語教育学会 p.31 - 62
- 小脇光男(1990)「多様化する留学生とその日本語教育」『熊本大学教養部紀要』25号 p.161 - 175
- 柴田俊造(1988)「東海大学の多様性をもつ日本語教育」『日本語教育』66号 p.28 - 47
- 庄司恵雄(1993)「研究現場における日本語使用に対する留学生と教官の意識調査 —研究留学生の日本語使用状況調査の報告を中心に—」『岡山大学留学生センター紀要』第1号 p.99 - 116
- 助川泰彦、福島悦子(1992)「日本語研修コース修了生に対する追跡調査」

『東北学日本語教育研究論集』7号 p.106-129

田中 望(1988)『日本語教育の方法 ―コース・デザインの実際―』大修館書店

名古屋大学留学生センタープロジェクトチーム(1996)『日本語の研修コース
修了生追跡調査報告書2』名古屋大学留学生センター

仁科喜久子、武田明子(1991)「理工系大学における外国人留学生の日本語能力に関する調査分析 ―東京工業大学大学院課程を中心に―」『日本語教育』75号 p.113-123

二宮 皓(1983)『日本の大学の国際化と大学教育に対する外国人留学生のインパクトに関する研究』(昭和58年度科学研究費補助金研究成果報告書)

日本語教育学会コース・デザイン研究委員会(1991)『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社

宮地 裕、田中 望、斉藤里美(1993)『日本語の教育とその理論』放送大学教育振興会